2010 年度報告書（研究員）

氏　名	渡邊　拓也
職　位	グローバル COE 研究員（短時間）

研究概要

・19 世紀の阿片と「未来指向性」: 近代西欧型ノーマライゼーションの隠れた条件としての

今年度は 19 世紀フランスにおける阿片使用の問題をめぐって、特にイギリスとの比較において調査研究を行った。古代より優れた鎮痛剤として知られた阿片が、近代に危険薬物として再定義されたのはいかにしてだったか。そのプロセスは「医学の発達により物質の中毒性が発見され、やがて危険視されるに至った」といった単純な軌道を描いた訳では決して無い。フランスは 1845 年の法で阿片販売を規制しているが、これは多くの阿片使用者が存在したはずの英国よりも随分と早い。阿片中毒は、まずその毒性を鑑みて「病」として医学的に定義された。次にそれは、集合的レベルでの問題つまり社会に害悪をなすものとして捉え返される。その背景にあったのは長期使用による無気力状態と社会の生産力・労働力の低下への懸念だった。そして最後に、問題は再び個人レベルへと折り返されて、阿片使用は「悪徳」として再定義された。阿片への耽溺は、使用者本人の趣向、習慣、心の弱さといったものによって引き起こされると考えられたのである。阿片中毒者はこうして「治療されるべき患者」と「非難されるべき逸脱者」という二重の定義付けをなされることになった。19 世紀の阿片は、阿片戦争、公衆衛生学の予防的な政策提言、ドラッグに溺れる「心の弱さ」の言説による私的領域への責任の送付といった諸要素が複雑に絡み合って、禁止薬物への階梯を下っていく。また人口概念の傍らでこのプロセスの進行を促進する役割を果たしたのは、当時の進歩主義的な時代認識だった。進歩発展に対する楽観や未来への指向性が、つまるところ社会的ノルムの持つ「正常化＝均質化」機能の隠れた必要条件だったのである。この研究成果は 2011 年 1 月に「医薬品からドラッグへ：19 世紀フランスの阿片」のタイトルで論文にまとめられ、現在雑誌投稿中である。

業績リスト（著書、論文、報告、その他に分けて主要なものを記入する）